



文教協会50年を振り返る③

10周年〔昭和49年〕

文教協会事務局

東京オリンピックが開催された昭和39年は、大垣市文教協会が発足した年でした。それから10年後の昭和49年は、オイルショックを期にまさに高度経済成長期を終えていく時代でもあります。国内のインフラが整備され、国民の所得は増え、電化製品が普及するなどくらしは便利になりました。それ以後、日本は経済成長を続け、世界有数の経済大国となりました。しかし一方で「世界幸福度ランキング」、日本は90位というデータもあります。

2012年の今、3.11大震災後、ますます出口の見えにくくなった未来を生きる子どもたちが、「夢と希望をもつ」ためには、教育の力は不可欠です。

松尾芭蕉の俳諧用語に「不易流行」という言葉がありますが、今こそ教育の本質を見失わないようにしたいものです。文教協会設立10年前後、当時の大垣の教育を担っていた諸先輩方の言葉から、「不易流行」を感じてみてください。

教育愛

大垣市教育長 水野 重信

はじめて小学校教師として赴任しました時、老校長がまっ先に「教育とは子どもを愛することだ」といわれました。

このことは、今も新学期が来るたびに思い出すことであります。そのときは当たり前のことと思って余り強く心に響かなかったのですが、年を経るにしたがって意味の深いことに気がついてきました。流行歌手は愛するということばをくりかえし歌っていますが一体愛とは何かという答えはできません。

しかも、教育愛となるとはつきり書いたものも少ないようです。愛の意味を「他者と生の共同」という人があります。普通には、友愛、恋愛、親子愛、夫婦愛から隣人愛とか人類愛などとつかわれています。これらのことから自他の合一、生の共同といえます。つまり自己の精神をつくして他者と共に生を表現していくのが愛のはたらきでしょう。

愛は、家庭教育であろうと、学校教育、社会教育であろうと根底となることは否定できません。毎日道を歩けば多くの人に出会いますが、その時の自他は人格関係が成り立たないので単に路傍の人にすぎません。しかし幾年ぶりに会った友人とことばをかわし、ほほえみをかけるともはや路傍の人ではなく人間関係が成り立ちます。愛の立場は両者が境をつくることではなく自己と他者が積極的に生きるすがたを意味します。

教育の場で考える愛は、権力関係ではなく、また服従関係でもなく、まして強圧や恐怖によるものでもありません。服従を強いれば内面では否定をともないます。指導者の優位は権力ではなく、人格的な力にたいして尊敬と信頼をもつ人間関係によるものであります。

ペスタロッチは、「わたしたちは、ともに泣き、ともに笑った……わたしは、子どもとともにあったのである……」と。このように他者実現の愛で教育は進められていくと思います。

(昭和49年4月6日号)

現代の教育に想う

大垣市連合PTA会長 宮脇 一嘉



戦後、日本の教育は自由と平和の旗印のもと、新しく民主主義教育に改革され、六三三制の実施となりました。同時に子どもの幸福と健全な成長を願うPTAができました。

以来二十数年経った今日、その教育目標により完成されようとする最高学府の大学生が、ゲバ棒を振りかざす姿を見ると、これが私たち親や先生の願っている姿かと思う時、考えさせられます。平和な日本になり、子ども達に二度と自分達の歩んだ戦時中の苦しみをさせまいとする父兄と先生の教育の結果がこの姿だとするならば、どこかで何かが欠けているのではないかと思います。

(中略)今日では、少しでも良い学校に入ってほしいという親心で、勉強に追われた青白い子どもが、大学生となった時、自分の情熱を發揮する場所を知らず、他人に迷惑をかける事を考えないで行動する姿が、大学でのゲバ騒ぎではないかと思います。

子ども達の成長の過程で、自分の主義主張をしながら、大人と自分をためて伸びていく姿が、大人への脱皮であるとするならば、その脱皮の時点で学校の先生もまた、私たち親も、子どもの心をよく理解し、問題を真剣に研究して、数多い社会経験の中から、子供たちの前身を助けるべきではないでしょうか。(略)

(昭和49年11月1日号)

不易流行:いつまでも変化しない本質的なものを忘れない中にも、新しく変化を重ねているものをも取り入れていくこと。また、新味を求めて変化を重ねていく流行性こそが不易の本質であること

時代を振り返る

昭和49年の日本のキーワード(オイルショック翌年)

- ◇佐藤栄作元首相 ノーベル平和賞受賞
- ◇小野田元日本兵 フィリピンより帰国
- ◇長嶋茂雄 引退
- ◇コンビニ1号店開店、「アメダス」導入

昭和49年の大垣市のキーワード

- ◇公設地方卸売市場解説
- ◇岐大バイパス全線開通
- ※明日の大垣を築く14万市民との対話集会始まる



文教協会10周年記念講演会より



- ◇とき 11月8日(金)午後2時
- ◇ところ 興文小学校 講堂
- ◇演題 「文教大垣の源流」
- ◇講師 吉岡 勲先生(岐阜県資料館準備室)
- ◇内容

(1) 大垣の地理的・歴史的環境

西濃地方は、西部と北部は山地で山裾は用水地帯、南東部へかけては輪中地帯となっている。歴史的にみて人の活動する舞台は、山地・山裾・低湿地へと移ってきた。大垣の地はこのあゆみの典型的な地といえる。

したがって、大和文化の東漸に大きな役割を果たした東山道時代には、大垣よりも安八郡神戸町あたりが政治・経済・文化の中心地となっていたようである。

大垣の地が大々的に開発されはじめたのは、天平勝宝8年(756)に東大寺に施入された大井庄にはじまるとされている。平安時代なかばの記録によると250町、その内耕地は50町とされている。大井庄からの貢租物は、“仏教を興隆し国家を鎮護する”ことを祈る法華会に使われた。

このような姿で出発した大井庄も、東大寺の現地支配人である大中臣氏が、その管理にあたった、その下にいくつかの在地土豪があつて、大垣の地名のおこりであるといわれる“大垣氏”が資料に姿を見せるようになってきた。

その後、大垣には城が築かれて、この地の一円知行化に多くの武将が懸命になるのであるが、盛衰の興亡がはげしく長くは続かず、関ヶ原合戦をむかえることになる。徳川家康は関ヶ原合戦後、岐阜の加納を東山道の要所にしようとしたが、領主奥平氏の衰退によって、寛永12年(1635)戸田氏を兵庫県尼崎より移して、大垣を要衝の地として位置づけることにした。

以後、戸田氏は11代236年間譜代大名として遇され、比較的安定した藩政を続けることができた。領主の安定は領民の安定となり、この安定が大垣の地を強く守り立ててくる源流となったといえる。

(2) 文教大垣の源流

戸田氏初代藩主氏鉄は、仏教を中心とする中世思想を否定し、人倫に重きをおく朱子学者の藤原惺窩や林羅山に教えを受けた。彼は幼少から書を好み、自身にも儒学の道に志した。氏鉄の学問に対する取り組み方は、歴代の藩主にもよく伝えられ、文運興隆の礎が築かれ、文教大垣の源流は氏鉄代にできた。

幕末によると、大垣藩も藩政改革に迫られて、その実をあげたのが小原鉄心である。改革に成功した鉄心は藩内外に発言力を高め、明治維新には朝廷の参密にまで任ぜられた。

その間、藩論の不統一から子の兵部が先頭にたつて朝敵としての行動に出ることもあったが、藩論の統一に成功することができた。その後会津征伐に功をあげた大垣藩は、新政府において、薩・長・土と肩を並べるまでになった。しかしながら、業半ばにして明治5年に鉄心が世を去ると政治面で大活躍した大垣も、以後政治・経済面に雄飛することはできず、個人の力で伸びるより外に道はなかった。

明治期に大垣より学者の輩出した背後には業半ばにして逝った鉄心のやすまることのない魂が生き続けていたのである。

(3) 現在の教育に思うこと

吉田松陰は幕末の難局を教育によって乗り切ろうとした。彼の著書「松下村塾の記」には、土地の心・教育目標・評価の在り方が鮮明にされており、教育の追いつめ方が厳しく迫っている。

現在の日本の教育には松陰のような厳しい追いつめ方が足りない。厳しい反省が足りないのと教師自身の姿勢に問題がありはしないだろうか。教育目標を現在のような不明確なままにしておかないで、もっと明確にすることが当面急を要する日本の教育の大きな課題である。

【昭和49年12月1日号】